

## 2024 年度 創価大学法科大学院

### B 日程 小論文試験

#### 問題 1 (配点 50 点)

以下の文章（後記【出典】からの抜粋を参考に作成）を読んで、各【設問】に答えなさい。

#### 「論語」を読む人のために

東洋を知るには儒教を知らなければならない。儒教を知るには孔子を知らなければならない。そして孔子を知るには「論語」を知らなければならない。「論語」は実に孔子を、従って儒教を、また従って東洋を知るための最も貴重な鍵の一つなのである。

☆

「論語」は、孔子の言行を主とし、それに門人たちの言葉をも加えて編纂したものであるが、すべて断片的で、各篇各章の間に、何等はっきりした脈絡や系統がなく、今日から見ると極めて雑然たる集録に過ぎない。しかし、それだけに、編纂者の主観によってゆがめられた点は比較的少いであろう。

孔子の言葉を記したものとして、「論語」のほかに、しばしば「易」の「十翼」があげられる。しかし、それには、古来学者の間に多くの疑問があり、それを孔子の書であると断定する根拠は薄弱である。従って、今日では、「論語」は不十分ながらも、孔子の言行をうかがうことの出来る、唯一の確実な書とされているのである。

☆

「論語」編纂の年代、ならびにその編纂者が何びとであるかは、まだ十分つまびらかにされていない。しかし、孔子の没後いくらかの年月をへたあと、すなわち西紀前およそ四百数十年ごろ、門人の門人たちの手によって編纂されたものであることは、ほぼ確実なようである。

「論語」という書名は、孔子直接の門人たちが記録しておいたものについて、編纂者たちが、おたがいに意見を交換し、論議しつつ撰定したという意味で名付けられたものであろうと信ぜられている。

☆

「論語」は、秦の始皇が天下を統一した時、いわゆる焚書の厄に会った。始皇は儒教の政治思想が自分の専制的統一国家の政治に合致しないという理由から、ちょうど独逸のヒトラーが書を焼いたのと同じ手段をとったのである。そのため「論語」は他の書と共に一時姿を消したが、漢代にいたって再び世に出ることになった。その時発見された「論語」に三種あった。その第一は齊の国から発見されたもの、第二は魯の国から発見されたもの、第三は孔子廟の壁の中にぬりこめられていたものである。それらはかなり内容をこことにしていたので、それぞれ「斉論」「魯論」「古論」と呼んで区別されるようになった。「古論」というのは、古体文字で記されていたからである。

この三種の「論語」は、発見後しばらくの間は、それぞれにそのままの内容で読まれていたが、後漢以後、彼此参酌して内容を修訂し、註解を加えるなどの努力が張侯、鄭玄、何晏等二三の学者によって払われ、宋代にいたって、それらを基にした邢昺の「論語註疏」があらわれた。更に儒教の大成者として有名な同代の朱熹は、「大学」、「中庸」、「論語」、「孟子」の四者を合して、いわゆる「四書集註」を作った。爾来前者を「古註」と呼び、後者を「新註」と呼ぶならわしになったが、今日最も広く読まれているのは「新註」による「論語」である。本訳もまた主として新註により、なお古註その他を参考にすることにした。

☆

「論語」がはじめて日本に伝来したのは応神天皇の十六年であるが、それが刊行されたのは約一千年後の後醍醐天皇の元亨二年である。それは、その後つぎつぎに伝来した儒教の他の諸経典と共に、先ず宮廷貴族の思想と行動とに影響を与え、つぎに武家に及んだ。そして、明治維新にいたるまでの約千五百年間に、儒教は仏教と相並んで——仏教の伝来は儒教におくれること約二百年である——国民生活を支配する最大の精神的基調をなすにいたったが、とりわけ「論語」は、階級の上下をとわず、文字を知る国民の多数に読まれるようになり、その影響力は、徳川時代以後文字を知らない国民の家庭生活や社会生活にまで及び、「論語」をはなれては、国民の道德生活を語る事が出来ないかのような観をさえ呈するにいたったのである。

かような影響力も、しかし、明治維新後の西欧文化の伝来と共に、急激に退潮しはじめた。そして半世紀とはたたないうちに、儒教は全面的に若き世代の多数によって敬遠され、ついで軽蔑され、最後に忘却され、現在の若き世代の間では、高等の教育を受けた者でさえ、「四書」「五経」の何であるかを知るものが稀有であり、「論語」のごときも、わずかにその名が知られているだけで、専門の学徒以外に進んでその内容を知ろうとする欲望をおこすものは、絶無に近い状態である。

かような急激な退潮、——約千五百年間に亘って高潮しつつ来てものが、百年とはたたないうちに底を見せるほどのかような急激な退潮が、果して何に起因するかについては、ここではふれない。今はただ、それが、よかれあしかれ、まぎれもない事実であるということだけを認識するにとどめておきたい。

しかし、この事実を認識するについて、忘れてならないことがある。それは、そうした急激な退潮は、主として国民意識の表面において行われたことであって、必ずしも生活の事実においてはではないということである。むろん意識の表面にあらわれる変化が、生活の事実は何の変化も及ぼさないということは全くあり得ないことで、その意味で、明治以後の国民生活から、儒教的なものがかなりの退潮を示していることはもちろんである。しかし、それは決して意識の表面においてのように底を見せるほど甚しいものではなかった。いや、もっと適切にいうと、底は見せながら、その底にし

みとおった儒教的なしめり気が、今もなお国民生活の根をうるおしており、そしてそのしめり気は、次第に眼には見えなくなるかも知れないが、容易に蒸発してしまいそうには思えないのである。

この事実を認識することは国民にとって極めて重要なことである。というのは、それは、やがて国民をして、儒教の諸経典中、せめて「論語」ぐらいは、もう一度意識の表面に浮かびあがらせることの必要を痛感せしめるであろうからである。私は、このことを、必ずしも儒教精神の復活を希う意味においていっているのではない。ただ私は、儒教精神が、よかれあしかれ、今もなお相当の力をもって国民生活の事実を動かしている以上、国民は当然その精神を研究批判の対象として意識的に取りあぐべきであり、そしてそのためには、少くも「論語」ぐらいは広く国民の間に読まれるべきであると思うのである。

☆

「論語」を読むにあたってわれわれの忘れてならないことは、それが「精神の書」であり、「道徳の書」であると共に「政治の書」であるということである。この点で、政治とはかかわりなく、或はむしろ政治否定の立場に立って、人間の幸福乃至社会秩序の維持を、純粋に個々の人間の魂に求めようとしたキリスト教や仏教の諸経典とは、いちじるしく趣を異にしているのである。

「論語」の中で、理想的人物、或は理想に近い人物を表現するために、「聖人」「仁者」「知者」「君子」等の言葉がしばしば用いられているが、それらが、精神的・道徳的にすぐれた人物を意味することはいうまでもない。しかし、精神的・道徳的にすぐれた人物は、「論語」においては、常に為政家としてすぐれた人物であることをも同時に意味しているのである。むろん、だからといって、修徳の目的が政治的権勢の獲得にあるというのではない。権勢の位置につくかどうかは天命によって決する。しかし、天命は必ず有徳の人に下るべきであり、そして修徳の理想は天命をうけてそれに恥じないだけの資格を身につけることにあるというのが「論語」を一貫して流れている思想なのである。その意味で「論語」はまぎれもなく「政治の書」であり、そのことを忘れては「論語」を正しく解することは不可能なのである。

☆

「論語」が「政治の書」であるということは、同時にそれが「未来世の書」でなくて「現世の書」であり、「神の書」でなくて「人間の書」であるということの意味する。その点で、等しく「精神の書」ではあっても、仏典やバイブルとは全くその立脚点を異にするのである。そしてこのことが、孔子自身の性格とその修徳の過程を物語るものであることは、いうまでもない。

古来聖者の名をもって呼ばれている人々の中で、孔子ほど常識的・現世的な人はいないであろう。彼には、その一生を通じて、ほとんど神秘的・奇蹟的な匂いがなく、また従って、その向上の道程において、天啓とか靈感とかによる、いちじるしい飛躍の瞬間がなかった。つまり彼は、自分の置かれた環境において、日常生活を丹念に磨きあげ、一步一步と自分の世界を昂揚し、拡大しつつ、あくまでも現実に即して現世の理想を構築し、そしてその理想が、超自然の力をかかなく、人間自からのたゆまざる努力によって実現可能なことを証明しようとした人なのである。

孔子にも、なるほど「天」の思想があり、天帝に対する厳粛な信仰があった。その点で彼に宗教的なものが全然なかったとはいえない。しかしその「天」は、人間をそ

の罪悪と苦悩から無差別平等に救済せんとする大悲大慈の力ではなく、むしろ静かに人間個々の境遇や、能力や、努力のあとを照覧しつつ、それぞれの運命乃至使命を決定する力、即ち神というよりはむしろ自然法というに近いものであったのである。彼が「天命を知る」という時、それは彼が彼自身を道徳的に鍛錬することによって生み出した自信の叫びであって、決して遠い天上からの神秘的啓示による飛躍を意味するものではなかった。彼は、かくて、天を語る時においてすら、あくまでもその足を地上に立て、その眼を地上にそそぎ、その全心全霊を、人間自らの力による人間社会の秩序立て、いかえると政治の理想化にぶちこんでいたのである。

「述べて作らず」——これが孔子の学問の態度であり、また教育者としての態度であった。その意は、古聖人の道を祖述する以上に敢て自己の創見によって新しい道徳律を作るのではない、というのであるが、古聖人とは、孔子においては、「大学」にいうところの「明德を明らかにした」地上の人であり、「修身・齐家・治国・平天下」を実現した理想的為政家であって、決して現世を超越した神秘的存在ではなかった。もっとも、それほど的人物が果して史上に実存したかは頗る疑わしいのであって、むしろそれは孔子自身の修徳をとおして描き出された理想の象徴であり、創作であると見る方が正しいのではないかと思われるが、孔子自身にとっては、それはあくまでも実存の人物であったと信じられていたのである。ここに孔子の現世的性格と現世的修養の道程とが明らかにかがわれる。すなわち、彼にとっては、人間の理想社会の実現は決して人間自身の努力の限界をこえたものではなく、それは政治の理想化によって可能であり、そしてその実証として過去の歴史に聖人の治績があったわけなのである。

## ☆

なお、「論語」を読むにあたって、もう一つ大切なことは、その時代的背景を一応心得ておくことである。このことは、「論語」が政治の書であるだけに、政治とは無縁な仏典やバイブルを読む場合に比して、はるかにその重要度が高い。で、それについて簡単にふれておきたいと思う。

孔子は西紀前五二二年に生れ、同四七九年七十四才で歿したが、この時代は、中国の歴史で普通いうところの春秋時代の末期、すなわち、夏・殷・周とうけついで来た三代の王朝の最後の王朝たる周室が、全くその権威を失って、十二の諸侯が覇権を争い、しかもその諸侯も内部的に決して安全ではなく、内乱が頻発して、徐々に政治の実権が下にうつり、ほとんど無政府的な混乱状態を呈しつつあった時代である。

周王朝の政治組織は諸侯をその下に従えていたという意味で、もとより封建制度であった。しかし有力な諸侯の大部分は周室の同族で、共同の宗廟を持ち、祭祀を共にする宗族関係で周室に結ばれており、しかもこの関係は、氏族を異にする侯国以下との間にも、社稷（土地の神・穀物の神）を祭ることによって延長されていたのである。だから、周代の国家は、封建国家というよりも、むしろ祭政一致の宗族国家という方が適当であった。そして、それに基づいて、天子・諸侯・卿・大夫・士・庶民というように、厳格に身分が定まっておき、祭祀・礼法のごときもその身分に応じてそれぞれの規定があり、それをみだすことは、やがて国家の秩序や道義をみだす最大の悪徳とされていたのである。

孔子は、かような国家組織の中に生をうけたのであるが、彼はその組織の根本については何の疑惑も抱いてはいなかった。それどころか、周祖武王をたすけてその組織に基礎をおいた周公（武王の叔父）は、彼にとっては、いわゆる古聖人の一人だったのである。しかも彼の生地魯国（彼は現在の中国山東省曲阜県、当時の魯国昌平郷陬

邑に生れた)は、周公の子孫の国で、その宗廟には周公が祭られており、いわば周室の政治と道義の守本尊ともいうべき位置にあった。かくて彼は、周室の諸制度について疑惑を抱くどころか、それを至上のものと考え、誇りをもってその研究に精進することを念願した。「論語」にいわゆる「十有五にして学に志す」とあるのも、少年時代における彼の、この意味での精進を物語るものに外ならないのである。

かような彼が、春秋末期の諸侯・諸卿・諸大夫の下剋上や、僭上沙汰や、権力争いや、利害本位の取引きや、武力抗争等について、深い憂いと怒りを感じたであろうことはいうまでもない。そしてまた、それがいよいよ彼の研学心や教育熱に拍車をかけ、実際政治に対する彼の欲望をそそり、ひいては彼の苦難にみちた諸国巡歴の旅への大きな刺戟になったであろうことも、疑いを容れないところである。

「論語」には、彼のそうした憂いや怒りの言葉が、いたるところに散見される。否、考えようでは、「論語」の言葉のすべてが、周朝の政治と道義の維持昂揚のための言葉であったといえないこともない。そしてここに、「論語」を読む者の心しなければならぬ重要な二点があるのである。

その第一は、「論語」の言葉のあるものは、今日のわれわれの時代においては、文字どおりに受け容れられるものではなく、また強いて受け容れようとしてはならないということであり、その第二は、しかし、だからといって、「論語」をただちに時代錯誤の書として早計にすててしまってはならないということである。

なるほど孔子は、中国周代の民として、周公によって基礎をおかれた当時の諸制度を讃美し、その精神を生かすことに努力した。その点で、まぎれもなく彼は封建的宗族国家の忠実な一員であった。従って彼の言行のあるものは、その表面にあらわれたかぎりにおいて、今日のわれわれにはむしろ奇異に感じられ、しばしば滑稽にさえ感じられるものがある。特に、「論語」の中で彼の坐作進退を記した条下や、彼が祭祀その他の礼の形式に関して語るのを読む場合においてそうである。また彼が治者被治者の関係について語るのを読む場合、その中のある言葉については、おそらく今日の何人も重大な疑問を抱かずにはいられないであろう。そして、そうした点から、「論語」が今の日本人の意識の中で影がうすくなって行くことも、一応うなずけないことではない。

では、「論語」は、周代の封建的宗族国家の經典以上の何ものでもないかという  
と、決してそうではない。かりに「論語」から周代の色をおびていると思われる一切の表現を消し去って見るがいい。また、今日から見て少しでも時代錯誤だと思われる表現があったら、それをも遠慮なく消し去って見るがいい。そのあとに何も残らないかということ、むしろわれわれは残るものの多きにおどろくであろう。しかもそれらはすべて古今を貫き東西を貫く普遍の真理であり、そしてそれらの真理が、時代錯誤だと思われ、周代の考え方だと思われる表現の底にも、厳として存在していることに気づくであろう。

「論語」を通じて見た孔子は、決して単なる周代の忠実な封建人ではなかった。またむろん事大的曲学阿世の徒でもなかった。仁に立脚して知を研ぎ、詩と楽とを愛して調和に生き、敬慎事に当り、勇断事を処し、剛毅正を守る底の万世の師が、たまたま周代の衣を着、周代の粟を食み、周代の事を憂え、周代の事に当たったが故に、周代の色を帯びたまでのことなのである。

かくて「論語」は周代の皮に包まれた真理の果実であるということが出来よう。われわれはその皮におどろいて果肉をすててはならないし、さればとって、皮ごとのみにしてもならない。皮をはいで果肉をたべる、これが要するに「論語」の正しい読みかたなのである。

【出典】下村湖人『現代語訳論語』（底本「下村湖人全集 第五巻」池田書店 1965  
（昭和 40）年 5 月 15 日、青空文庫 2021 年 10 月 11 日修正）

※小論文試験の出題に合わせて、出典の一部を抜粋、転載利用している。

【設問 1】（配点 15 点）

筆者は、論語とはどのような書籍だと紹介していますか。200 字～250 字で説明しな  
さい。

【設問 2】（配点 15 点）

筆者は、なぜ、論語を読む必要があると考えていますか。200～250 字で説明しな  
さい。

【設問 3】（配点 20 点）

筆者は、論語を正しく読むにあたって何に留意すべきであると考えていますか。そ  
の理由を明らかにしながら、200～250 字程度で要約しなさい。

以上



## 2024 年度 創価大学法科大学院

### B 日程 小論文試験

#### 問題 2 (配点 50 点)

次の文章（下村湖人「論語物語」：底本「下村湖人全集 第五巻」池田書店 1965 年 5 月 15 日、青空文庫 2023 年 8 月 20 日修正の文章から一部を抜粋、転載利用している。）を読んで、各【設問】に答えなさい。

##### 【設問 1】 (配点 25 点)

下線部に関して、孔子は、なぜ子賤を「君子」と表現し、弟子の子貢を「器」と表現して泣いたのか。「君子」と「器」の違いが明確になるように説明し、孔子の子貢に対する想いが解るように 200～250 字で説明しなさい。

##### 【設問 2】 (配点 25 点)

【設問 1】で理解した孔子の言葉の意味を、あなたが描く法律家としての活動に対してどのように受け止めたのか（肯定的でも否定的でも構いませんので）が解るように、あなた自信の言葉で、200～250 字で説明しなさい。

#### 瑚璉

「子賤は君子じゃ、あれでこそ真の君子と云えるのじゃ。」

孔子は、子貢の前で、しきりに子賤を讚め出した。

子賤は子貢より十八歳の後輩である。このごろ魯の單父<sup>たんぷ</sup>という地方の代官になったが、いつも琴を弾じて堂を下らない。それでよく治まっている。子賤の前に代官をしていた巫馬期<sup>ふまき</sup>は、星をいただいて出で星をいただいて帰るといふほど骨折ったが、子賤ほどにうまくは治まらなかった。

そこで巫馬期が、ある日子賤に、

「一たいどこに君の秘訣があるのだ。」

と訊くと、子賤は、

「私は人を使うが君は自分の力を使う。だから骨ばかり折れるのだ。」

と答えた。この答が世間の評判になり、孔子の耳にも入った。孔子は子賤が若いに似ず、よく徳を以て治め、無為にして化しているのを知って、心から喜んだのである。

しかし、子貢にして見ると、自分の前で若造の子賤が、そんな風に讚められるのは、あ

まりいい気持ではなかった。彼はそれを自分に対する皮肉のようにも聞いたのである。

（自分は、もう四十の坂を越してかなりになるのに、まだ一度も孔子にそんな風な讃め方をされたことがない。どちらかという、くさされる方が多かったくらいだ。）

彼はそう思って、暗い気持になった。そして、若い頃からの孔子との応待が、つぎつぎに思い出された。

いつの頃だったか、彼が孔子に、

「自分が人にされて嫌な事なら、自分も亦、人に対して、したくないものです。」

というと、孔子は言下に、

「それはまだまだお前に出来ることではない。」

と貶しつけてしまった。彼はその時のことを思うと、今でも顔から火が出るような気がするのである。

また、ある時、孔子は彼に対して、

「お前は学問の上で顔回に勝てる自信があるか。」

と訊ねた。顔回は、孔子がかねがね自分でも及ばないと云っていたほどの人物だから、その人に比較されるのは、彼として嬉しくないこともなかった。しかし、同時にこれは彼にとって不愉快な問であった。「勝てます。」と云い切るわけには無論行かない。腹の底では、「なあに。」という気が十分あるのであるが、それを云えば、謙譲の徳にそむくことになる。顔回に対して負けないというだけならとにかく、孔子にも負けないという意味になるのだから、よけいに始末が悪い。「仁を行う場合は師にも譲るな。」という孔子のかねての教訓もあるが、それとこれとは場合がちがう。で、結局彼は内心不愉快に思いながら、あっさりと謙譲の徳を守るより仕方がなかった。彼はこたえた。

「とても私などの及ぶところではありません。私はやっと一を聞いて二を知るだけですが、顔回は一を聞いて十を知ることが出来ます。」

すると孔子はその答を予期してでもいたかのように、

「そうだ、お前は顔回には及ばない。それはお前のいう通りだ。お前のその正直な答はいい。」

と云った。子貢としては、饅頭の外皮を讃められて髓をくさされたような気がしてならなかったのである。

しかし、子貢にとって何よりもいやな記憶は、彼が、ある日、しきりに門人たちと人物評をやっていたおり、孔子に横合から、

「子貢は賢い。私にはとても人の批評などしている暇がない。」

と、云われたことである。子貢に云わせると、孔子ほど人物評の好きな人も少い。他の門人たちが人物評をやっていると、御自身でも一口云わないでは居れない性である。然るに、自分にだけ、なぜあんな皮肉を云ったのだろう。あるいは自分を口舌の徒とと思っていたのかも知れない。そう云えば、孔子はかつて弁論の雄として幸我と自分とを挙げたことがある。弁論の雄などという、いかにも聞えがいいが、それは人間を讃める言葉として本質にふれたものではない。況んや幸我は懶者で嘘つきだ。彼こそまぎれもない口舌の徒

である。彼と自分を一緒にされたのではたまったものではない。

子貢は、そうした以前の事を考えながら、孔子が子賤を「君子だ、君子だ。」と讃めるのを聞いていると、ますますいらいらして来た。

この際、自分についても何とか云ってもらいたい。孔子も今では自分の価値を知っていてくれるに相違ないのだ。——彼はそう思って膝をもじもじさせた。

孔子は、しかし、彼の様子などにはまるで無頓着なように、下鬚を撫でながら、眼を細くして独語のように云った。

「だが子賤のような立派な人物が磨き出されたのも、もともと魯に多くの君子がいたからじゃ、子賤はいい先輩や友人を持って仕合せであった。」

子貢は眼を輝かした。彼は衛の人間ではあるが、子賤の先輩として、その指導にはこれまでかなり力を入れて来たつもりである。だから孔子が先輩といった中には、無論自分も含まれているはずだと思ったのである。しかし、彼はまだ何だか不安だった。はっきりつきとめて見ないうちは、わかったものではない。何しろ以前が以前だから、という気がした。同時に彼の心の底には、子賤などに劣るものではない、という自信があった。子賤を君子と讃めるくらいだから、ひょっとすると、孔子は自分に対して、それ以上の讃辞を与えるかも知れない、という自惚が、不安のかげに顔をのぞかせていた。

で、とうとう彼は訊ねた。

「先生、私についても何か一言云っていただきたいものでございます。」

彼は、云ってしまって、孔子がどんな顔をするか心配になった。自分のことに捉われ過ぎると思われはしないか、それが気になったのである。

しかし孔子の顔は極めて平静だった。そして無造作に答えた。

「お前は器じゃ。」

子貢は自分の耳を疑った。「器」という言葉は孔子が人物を批評する場合、これまでもおりおり使った言葉である。それは大していい意味のものではなかった。先ず「才人」とか、「一芸一能に秀でた人」とかいった程度の意味である。「君子は器であってはならない。」——そんな事を云って、孔子はよく門人を戒めたものである。その「器」が自分に対する批評の言葉として投げられたのだから、子貢が案外に思ったのも無理はない。

孔子は、しかし、あくまで平静だった。あたりまえの事を、あたりまえに云ったに過ぎない、と云ったような顔をしていた。

子貢はがっかりした。恥かしくもあった。一種の憤りをさえ感じた。出来れば一刻も早く孔子の前を退きたいと思った。しかし、また、このまま引きさがるともきまりが悪いような気がした。彼は進むことも退くこともできずに、蒼い顔をして孔子の顔を見つめていた。

孔子はやはり平然としていた。かなり、永い沈黙がつづいた。

子貢は、とうとうたまりかねたように膝を乗り出して、訥りながら云った。

「先生、器というのは、な、……なんの器です。」

孔子は、子貢のただならぬ様子に、はじめて気がついたかのように、かすかに眉をひそ

めた。

しかし、次の瞬間には、彼はもう微笑していた。そしてちょっと考えたあとで、しずかに答えた。

「瑚璉じゃな。」

子貢は、「瑚璉」という言葉を聞くと、不思議そうな顔をして、孔子をまじまじと見た。瑚璉は宗廟を祭る時に、供物を盛る器である。玉などを鏤めた豪華なもので、あらゆる器の中で、最も貴重なものとされている。

(瑚璉、——瑚璉——)

彼は何度も胸の中で繰り返して見た。そして、宗廟の祭壇に燦然と光っている一つの器を思い浮べた。

(器の中の器——人材の中の人材——一国の宰相。)

彼の連想は、次第に輝かしい方に向って行った。そして、いつの間にか、宰相の衣冠をつけて宗廟に立っている彼自身の姿を、心に描いていた。

(瑚璉とはうまく云ったものだ。)

彼は一瞬たしかにそう思った。その時、彼の顔はまさに綻びかけていた。

「瑚璉は大器じゃ。しかし、何ととっても器は器じゃ。」

さっきから子貢の顔の変化をじっと見つめていた孔子は、その時、念を押すように云った。

子貢は弾か<sup>はじ</sup>かれたように全身を動かした。そして見る見る彼の顔が蒼ざめて行った。

「子貢、何よりも自分を忘れる工夫をすることじゃ。自分の事ばかりにこだわってはいは君子にはなれない。君子は徳を以てすべての人の才能を生かして行くが、それは自分を忘れることが出来るからじゃ。才人は自分の才能を誇る。そしてその才能だけで生きようとする。無論それで一かど世の中のお役には立つ。しかし自分を役立てるだけで人を役立てることが出来ないから、それはあたかも器のようなものじゃ。」

孔子はこの頃になくしんみりとした調子で説き出した。

「それに……」

と、彼は少し間をおいて、

「年少者だからといって、すべてに自分より後輩だと思っはならぬ。年少者という者は馬鹿に出来ないものじゃ。ぐずぐずしているとすぐ追いついて来るのでな。だが……」

と、孔子は沈痛な顔をして、再び間をおいた。

「四十、五十になっても、徳を以て世に聞えないようでは、もうその人の将来は知れたものじゃ。」

そう云った孔子の声はふるえていた。

子貢は喪心したように、ふらふらと立上った。そして顔に手をあてたかと思うと、息ずすりして泣いた。

孔子もその時は眼に一ぱい涙をためていた。

以上